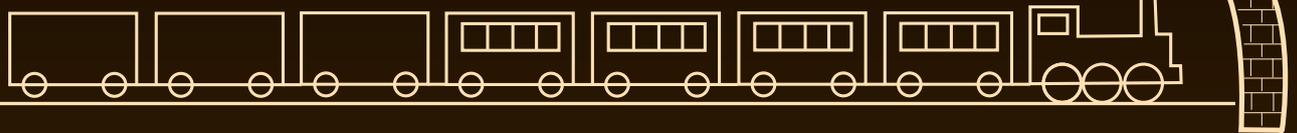


多治見の陶器商と 近代の美濃焼

平成23年7月19日（火）～12月28日（水）



はじめに



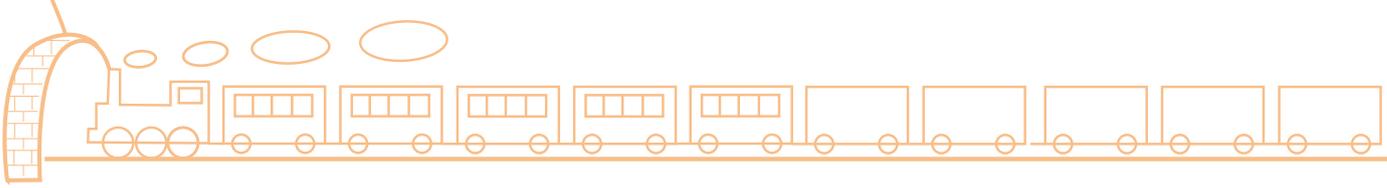
大正時代頃の中央線、土岐川対岸より撮影（多治見市池田町14号トンネル付近）
明治時代以降、美濃焼の流通範囲は北海道から九州まで日本全国に拡大していく。流通拡大の立役者といえるのが、鉄道を利用し、陶磁器見本を持って全国をまわった多治見の陶器商であった。旅回りによる美濃焼の販売形態は、文献上では少なくとも江戸時代後期には確認できるが、明治33（1900）年の中央線多治見駅開通により、陶器商が移動手段として鉄道を利用するようになったことで、美濃焼の販路は飛躍的に拡大していった。本展は、多治見の陶器商の販売活動に着目し、中央線多治見駅開通前後での美濃焼流通の変化をみていくものである。

また、近代は、民俗学の分野などでは、磁器製飯茶碗が庶民の生活へ普及していく時代として注目されてきた。民俗学者・柳田国男は、1度使ったら汚れる白木の碗に対し、何度使っても清潔さが保たれ、白く美しい磁器製の碗が普及したことは、庶民の「台所風景を明るくした」「1つの事件であった」と述べている（柳田1931）。飯茶碗に象徴される磁器製食器の普及時期は、美濃が輸入コバルトや銅版転写といった量産化技術を導入し、国内向けに安価な磁器製品を大量生産していく時期と重なる。庶民向け食器の需要増加の波に乗り、美濃では生産量を拡大し、それを多治見の陶器商が広範囲に販売していったことが、美濃焼の販売量と流通範囲の拡大につながったものと考えられる。

多治見の陶器商の販売方法は、販売員（番頭）が1人1地域を担当し、鉄道駅周辺にある得意先（陶磁器問屋や小売店）を、毎月あるいは2ヶ月に1回と定期的に訪問し、前回売り上げ分の集金をすると同時に、陶磁器見本を見せて新たな注文を受けるといったものである。昭和30年代頃までは、陶磁器見本の入ったカバンを肩に掛けた陶器商が、多治見駅から汽車に乗っていく姿は、ごく当たり前に見られた風景だったという。その後、旅の手段が鉄道から自動車へと変化はするものの、今から20～30年ほど前までは、旅まわりは陶器商の一般的な販売方法だった。しかし、現在、カタログやインターネットの普及などにより流通が変化し、旅まわりを行う陶器商は消えつつある。そんな中、本展では、近代以降の美濃焼大量流通の担い手としての「多治見の陶器商」の姿を、写真や文字記録、彼らの取り扱った陶磁器などから、振り返ってみたい。



陶磁器見本を入れた「見本カバン」
左：明治時代～昭和初期（柳行李に布を被せたもの）
右：太平洋戦争後（革製ボストンバック）



1 江戸後期～明治初期の美濃焼流通 –西浦店を中心に–



3代西浦円治 (1806～1884)
ガラス乾板で撮影した写真

明治時代になると、多治見^(注1)は陶器商が集中し、美濃焼の集散地として発展をとげていくが、その契機は江戸時代後期にあった。美濃焼は、19世紀初頭より尾張藩の傘下に入り、瀬戸の製品といっしょに「瀬戸物」として流通していたが、天保年間（1830年頃）、尾張藩から独立しようという動きが起こり、天保6（1835）年に「美濃焼物取締所」が多治見村に設置され、尾張藩の傘下でありながらも美濃の製品はこの取締所を通して一括して出荷されるようになる。これが、近代の多治見の美濃焼集散地としての発展につながっていく。ちなみに、19世紀前半は、美濃窯において19世紀初頭に生産が開始された磁器の生産量が、その商品価値の高さから急激に伸びていく時期でもあった。

美濃焼物取締役には西浦円治が就任した。西浦家は5代まで円治を襲名するが、初代取締役に就任したのは2代円治である。3～5代円治は、明治維新後、貿易会社設立や「西浦焼」とよばれる欧米向けの磁器生産を行い、美濃焼の発展に貢献していく。

西浦円治は、美濃の仲買人としても力を持ち、多治見本店のほか、弘化3（1846）年に大坂店、翌年に江戸店を開店し、美濃焼を中心とする陶磁器や原材料の販売を広く手がけている。西浦店の帳簿によると、多治見本店は出羽（山形県）、越後、越中、信州、甲州、江州（滋賀県）、伊勢、伊賀、江戸店は相州（神奈川県）、下総（千葉県）、常州（茨城県）、上州（群馬県）、野州（栃木県）、奥州（東北・仙台方面）、大坂店は山陽、山陰、四国と、3店舗で広範囲の得意先を持っていたことが分かり、すでに、幕末～明治初期には西浦店を通じて、美濃焼が全国へと流通し始めていたものとみられる（多治見市1980）。



5代西浦円治ら 明治時代中頃
前列左：5代西浦円治（1856～1914）
後列左：加藤助三郎（1857～1908）

明治5（1872）年、美濃では窯株・仲買株制度が廃止され、生産・販売が自由化される。明治5年には多治見の加藤助三郎が東京に「美濃屋」という陶器販売店開店、明治8（1875）年頃には辻惣兵衛ら大阪の陶器商数軒が多治見に出店するなど、販売自由化を受けた動きがみられるようになる（加納1958）。しかし、多治見の陶器商が数多く活動し始めるのは、明治33（1900）年の中央線多治見駅開通の頃まで待たれる。明治初期には、美濃焼の遠隔地への輸送には水運が利用されており、桑名港や名古屋港から海路を運ばれ、主に東京、大阪を経由しての販売が行われていたとみられる。中央線開通直前には、美濃焼は名古屋まで運ばれ、そこから汽車便によって全国へ輸送されたと記録されている（岐阜県1999;資料 No.134）。



西浦焼 釉下彩芥子文花瓶
明治時代後半

2 中央線多治見駅の開通

明治時代に入り、全国に張り巡らされていく鉄道網は、物資の大量輸送を可能にし、日本の近代化に大きな役割を果たした。明治5（1872）年、日本初の鉄道が新橋－横浜間を走り、明治22（1889）年には、東海道線が全線開通する。多治見を通る中央線は、明治33（1900）年に多治見駅^(注2)（名古屋－多治見間）が開通、明治44（1911）年には全線（新宿－名古屋間）開通する。

鉄道は、荷物の大量輸送を可能にすると同時に、人を遠隔地に運ぶことができる。多治見の陶器商にとっては、鉄道を利用し、自ら遠隔地の得意先に出向いていけるようになったメリットは大きかった。多治見駅開通により「益々多治見の集散地としての地位は大きくなり、それまでは主として大阪、東京の商人に販売していたのが陶器商の活躍はめざましく殆ど全国にわたって広く出張して得意先廻りをし販路の大拡張に専念したので北は北海道の果から南は九州台湾に及び全国くまなく至らざる所はなくなった。」（加納1958）と記されるように、鉄道が多治見の陶器商の重要な移動手段となり、販路が拡大していったことが分かる。



煉瓦造りの中央線トンネル（14号トンネル）
中央線開通時から複線電化される昭和41
（1966）年まで使用された。

注（1）多治見村本郷とよばれた地区。明治22（1889）年に町制施行、多治見町になる。
（2）多治見駅は、多治見町と土岐川を挟んで接する豊岡村に設置された。

3 多治見駅開通後の多治見の陶器商 –大嶽萬三郎商店を中心に–

現在の多治見市本町には、かつて陶器商の店舗であった千本格子窓の二階屋の建ち並ぶ一角があり、陶器商で栄えた往時の多治見を偲ばせる。

多治見の陶器商については、これまで、産地内の窯屋（製陶業者）との「仕送り窯」という関係が注目されてきた。「仕送り窯」とは、陶器商が生産に必要な原材料費を窯屋に仕送り（前貸し）し、窯屋が生産した製品の売上金から、貸付金と利子を返納させるという仕組みであり、製品の価格も陶器商側が決定した。「仕送り窯」によって製品の価格を安く押さえ込み、それを持った陶器商が全国へ見本販売に出向き、販路を拡大させたことが、美濃焼の日本国内への大量流通を可能にした要因といえる。「仕送り窯」は、借金として窯屋の重圧となる反面、美濃焼の販路を拡大させるという役割も果たした、功罪併せを持った仕組みであった。

このように資本を持ち、窯屋に仕送りを行う「大店」は、太平洋戦争前の多治見の陶器商の姿である。聞き取り調査などからも、複数の番頭を抱え、それぞれの担当地域へ番頭を派遣し、手広く商売を行う陶器商の経営方法が見えてくる。それが戦後になると、「大店」は復興に乗り遅れ、新興の小規模な陶器商が乱立する状態となったことで、「仕送り窯」は行われなくなり、窯屋との関係性は大きく変化していく。

大嶽萬三郎商店の活動 戦前の「大店」としての多治見の陶器商の姿がみえてくる資料がある。現多治見市御幸町に所在した「また大嶽萬三郎商店」である。この陶器商は、中央線多治見駅開通の2年後、明治35（1902）年に創業している。店主・大嶽萬三郎は2代襲名しているが、2代萬三郎は、大店を経営する傍ら、多治見町会議員を務める町の名士としての一面をもつ。大嶽萬三郎商店に残された4冊の台帳（帳簿）から、その取引範囲や規模、販売の方法などが見えてくる。台帳は昭和10～28（1935～53）年の集金記録が記される。戦前（1935～41年）は、九州、山陽、関西、関東甲信地方と地域ごとに別々の台帳に記述されるが、戦後（1949～53年）は1冊に集約され、経営が縮小しているのが分かる。

戦前の台帳には202軒の得意先が記されるが、とくに九州地方は得意先軒数66軒で、取引金額も最も多く、大嶽萬三郎商店の取引の中心地域であったことが分かる。また、台帳に記された得意先住所を地図に落としていくと、鉄道駅周辺に分布していること、さらに、集金日からは鉄道路線に沿って移動していくルートが見えてくる。九州の場合、福岡県を中心に九州東部を月の前半に、長崎県など西部を月後半に、それぞれ10日程度をかけてまわっていることが分かる。昭和11（1936）年3月の例を挙げると、月の前半7日間で、門司→大里→若松・赤間→若松・飯塚→伊田・行橋・八屋（ここまで福岡県）→中津・大分→白杵・竹田（ここまで大分県）というルートで14軒、月後半の9日間を駆け、博多→久留米→福島（ここまで福岡県）→佐世保（佐賀県）→長崎（長崎県）→熊本→川尻→八代（ここまで熊本県）→鹿児島というルートで17軒と、九州を一周している。この旅が1ヶ月置きに行われている。



本町にあった陶器商・辻惣兵衛の店 大正時代



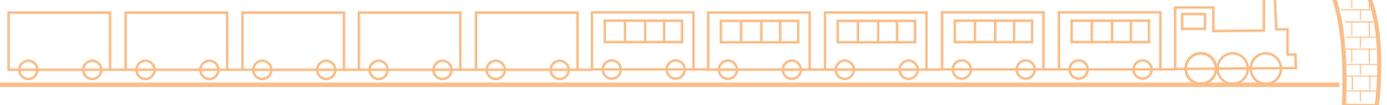
2代大嶽萬三郎 『合併記念帖』（1934年）より



大嶽萬三郎商店台帳 昭和10～16年
左は、台帳の目次のページ。得意先の最寄り駅、屋号、台帳記載ページが記されている。
多治見市図書館郷土資料室蔵



大嶽萬三郎商店の記録は、多治見の陶器商が鉄道路線を利用して遠隔地への販売を行っていたことを具体的に示す、貴重な資料である。さらには、九州地方というと、佐賀県に有田という磁器の大きな産地が控えており、そんな中、多治見の陶器商が九州地方一帯に入り込んで商売を行っていたという、興味深い事例である。



4 陶器商が取り扱った製品

近代以降の美濃窯は、積極的に西洋技術を導入し、生産効率の向上をはかっていく。明治15（1882）年頃から摺絵、明治20（1887）年代から銅版転写という量産の絵付技術を導入、安価な輸入コバルト（青色顔料）と合わせて使用されるようになる。大正時代には石炭窯や機械ロクロを導入し、美濃焼は安価な製品の大量生産化という道をたどっていく（多治見市1987）。とくに銅版転写については、大正14（1925）年刊行の『明治工業史 化学工業篇』で「美濃焼の銅版磁器は、安直の飲食器を以て全国を風靡したる」と記述され（日本工学会1925）、庶民向け食器の大量供給を可能にした技術だったことが分かる。

ところで、美濃窯はいくつかの小産地が連なり1つの窯業地を形成している。それら小産地ごとに生産品種の住み分け（分業）が行われてきた。近世の場合は「親荷物」という制度であり、明治時代以降は、同業組合によって専制権の制定が行われるようになる。大正13（1924）年に美濃陶磁器同業組合が制定した専制権をみると、多治見町＝煎茶茶碗各種、市之倉村＝盃、笠原町＝茶漬茶碗、妻木村（以後、現土岐市）＝白珈琲碗、下石町＝徳利、駄知町＝銅版四寸皿・生盛皿、肥田村＝銅版三五皿など、地域毎の製品の特徴が分かる（市之倉村役場1929）。実際に、発掘調査により、市之倉の酒井ヶ峯1・2号窯からは出土品の99%が盃、駄知の丸山窯で66%が鉢（井）という調査報告が出ていることから、地域的分業が行われていた様子が分かる。各産地で生産された多種の陶磁器は、多治見の陶器商の元へ集められ、多治見駅から貨車で全国へ出荷されていった。



高田徳利

産地：高田・小名田
明治～大正時代



爛徳利

主産地：下石
大正～昭和初期



盃

主産地：市之倉
大正～昭和初期



染付銅版飯茶碗

主産地：笠原
明治後半～大正時代



コーヒー碗（輸出用）

主産地：妻木
明治後半～大正時代



染付銅版小皿

主産地：肥田
明治後半～大正時代



染付銅版鉢（駄知井）

主産地：駄知
明治後半～大正時代

しるしもの

印物 近代の美濃焼流通のキーワードの1つといえる製品が「印物」である。印物とは、顧客の店名や屋号などの「印」を染付あるいは上絵付で入れた商品である。印物は、多治見の陶器商が消費地の問屋を介し、注文を受けることもあるが、「印物屋」という印物だけを専門に扱う商人もいる。印物屋は、高田・小名田の商人による、酒屋の店名を入れる高田徳利の行商から始まったと推測され、大正時代末、高田徳利が売れなくなり、酒屋や米屋などの小売店をまわり、盃などに入れる印の注文をとる商売に転じていったとみられる。

印物は、銅版やゴム判などで版が作られ、器面に転写された。多治見市大正町にある稲垣銅版店には、明治後期～昭和初期に作成された銅版版下が9千点以上残されてきた（小木曾2000）。明治時代には、コーヒー碗皿用など輸出向けの版が多いが、大正時代に入ると次第に印物の版が増加していき、国内向けの印物の需要が増加したことが分かる。印物は、店名とともに住所が記されていることが多い。稲垣銅版店の印物の版でも、北海道から九州まで全国の住所がみられ、美濃焼の流通範囲、陶器商の活動範囲が分かる資料となっている。



稲垣銅版店の版下
盃の見込みに転写されるもの。
銘柄や郡山市という所在地が入る。



印の入った煎茶碗の破片
（左：内面、右：側面） 高田大ザヤ窯跡出土



（春日美海）

※本誌掲載の近代の写真は、全て多治見市図書館郷土資料室所蔵。

【引用・参考文献】

- 小木曾郁夫 2000 『銅版版下図案集』『多治見市文化財保護センター研究紀要』第6号 多治見市教育委員会
春日美海 2011 「多治見の陶器商の販売活動にみる近現代の美濃焼流通—昭和初期の大嶽萬三郎商店を例に—」（南山大学大学院提出修士論文）
加納陽治 1958 『多治見風土記』窯業文化協会
神崎宣武 1984 『わんちゃ利兵衛の旅 テキヤ行商の世界』河出書房新社
岐阜県 1916 『岐阜県産業史』
岐阜県 1999 『岐阜県史 史料編』近代三
多治見市 1980・1987 『多治見市史』通史編上・下
多治見市教育委員会 1999 『酒井ヶ峯1・2号窯発掘調査報告書』
土岐郡市之倉村役場 1929 『市之倉村誌』
土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター 1995 『丸山窯跡発掘調査報告書』
日本工学会 1925 『明治工業史 化学工業篇』
柳田国男 1931 『明治大正史 世相編』（1971『定本柳田国男集』第24巻 筑摩書房）
山形万里子 2008 『藩陶器専売制と中央市場』日本経済評論社

多治見市文化財保護センター企画展

「多治見の陶器商と近代の美濃焼」

展示期間：平成23年7月19日（火）～12月28日（水）

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：土・日・祝日 入館無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26

電話 (0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>